

日本近現代文学作品を用いた日本語授業の試み —オンラインによる日本語授業実践報告—

神村 和美

はじめに

本来、約半世紀ぶりの東京オリンピック・イヤーとなるはずであった2020年は、奇しくもコロナウイルスの世界的パンデミックが引き起こされたブレイグ・イヤーとなってしまう、教育界も例に洩れず大打撃を受けていることは周知のとおりである。

一方で、インターネット社会の利点を生かした「オンライン授業」を取り入れることで、教育を継続する糸口をどうにか見つけられたことは不幸中の幸いであったともいえる。「オンライン授業」を取り込むことで、従来の教育方法、教育のあり方を見直す機会が教育関係者に与えられた意味は決して小さくはない。

本稿は、筆者が2020年度に担当した留学生対象の日本語クラスのなかでも、文学テキストを用いて授業をおこなったクラスにおけるオンライン授業の実践報告である。コロナウイルス蔓延状況如何によって、引き続き留学生の入国が許可されない場合も想定され、より質の高いオンライン授業、及びハイブリッド方式の授業方法を模索する必要があるため、初めてのオンライン授業の試みを記録として遺すことで課題を炙り出し、よりよい教授法の探求をおこない、文学教育と日本語教育の接点を見つめなおし、文学作品を用いた日本語教育の可能性を掘り下げることを目的とする。

1. 学習者のレディネス

今年度、筆者が担当した日本語クラスのなかで、文学作品を用いた授業をおこなった二つのクラスを、仮にAクラス、Bクラスと称することにする。以下は、それぞれのクラスのレディネス、授業概要をまとめたものである。

【Aクラス：前期のみ】

- ・ヨーロッパ（ハンガリー・ポーランド）からの交換留学生 5名
- ・中国からの本学経済学部在校生 3名
- ・レディネス：N2取得レベル

このクラスの学習者は、筆者担当の他の授業で文法・語彙（N1レベル）を構造シラバスの学習しているため、本授業では、日本文化への理解・関心を深めることを目的とし、様々な生教材（authentic material）に触れ、ディスカッションを通してアウトプットをおこなうという方法を採用した。

また、前年度からこのクラスの学生たちを担当していたこともあり、日本文学に興味を示している学習者が数名存在していることは把握していたため、クラス全体の意向を確認したうえで、中途から日本文学作品を用いて授業を進めることとなった。

【Bクラス：通年】

- ・アジア（中国・ヴェトナム・シンガポール）からの本学別科在校生 12名
- ・レディネス…N2取得レベル

本授業は、本学の別科でも学際的な取り組みが行われているBクラスの日本文学原書講読の授業である。日本の文学作品を通して、日本文化への興味・関心・理解を深めることを目的としたものであり、前・後期に一作品ずつ日本の文学作品（メディアミックスも含む）を最後まで読み通し、作品を通して感得したことをアウトプットできることを目標としている。ちなみに昨年度のBクラスでは、前期は、吉野源三郎原作／羽賀翔一 漫画「君たちはどう生きるか」(マガジンハウス)、後期は村田紗耶香「コンビニ人間」(文春文庫)を取り上げた。

2. 取り扱う文学作品の選定

【Aクラス】

- ①太宰治 「葉桜と魔笛」(初出：『若草』1939年4月)
- ②江戸川乱歩 「人間椅子」 (初出：『苦楽』1925年9月増刊号)

Aクラスは、少人数クラスのメリットを活かし後行シラバスを想定していたが、数名を除き、ほぼ全員の学習者たちが自発的にカメラオンでの参加をしてくれたことで、比較的スムーズに学習者のバックグラウンドやニーズを聞き出すことが可能となり、授業の方向性を決めることができた。

ただし、本の購入に抵抗を感じている学習者もいたため、「青空文庫」でインターネット公開されている著作権フリーの文学作品を扱うことにした。そこで、「青空文庫」で作品が開放されている数名の作家を、インターネット上の記事や自作スライドで紹介し、その中から学生が興味を示した作家のものを適宜取り扱うこととした。

また、音楽活動を趣味としている学習者もいたため、作品が決まるまでは、JPOP

の歌詞の読解・MV鑑賞（本学のメイン・ストリートにはハナミズキが植樹されているため、一青窈「ハナミズキ」、ほとんどの学習者が知っていると言っていた米津玄師「パプリカ」などを取り上げた）や、詩（吉野弘「夕焼け」／宮沢賢治「雨ニモマケズ」）、サラリーマン川柳、近現代の短歌・俳句の鑑賞・創作チャレンジをおこなった。そして、文学作品に関しては、結果的に上記のものを順番に取り扱うこととなった。

「葉桜と魔笛」については、女性の一人称独白体であり、老婦人の回想という構成も明確で、日本語を母語としない学習者にとっても混乱しにくいこと、語る〈私〉と語られる〈私〉といった〈語り〉の構造の問題なども授業者の工夫次第で掘り下げてみせることが可能に思われたこと、季節がちょうど葉桜の頃であり、コロナのためになかなか外に出られない学習者たちに季節を感じさせることのできる教材であること、作品に登場する「軍艦マーチ」についても、YouTubeでの視聴共有が可能であるため選定した。

「人間椅子」については、作品の長さがちょうど良く、また、比較的レベルの高い数名の学習者が各々積極的に発言し、授業をリードする傾向があったため、椅子職人の手紙の衝撃的な内容とそれを読みながら戦慄する女性作家の心理が二重に読者に迫ってくるという構成の面白さ、結末の意外性、謎を解くための細部の読み込みなどの共有がディスカッションを通すことで可能であると判断し、選定した。

【Bクラス】

- ①前期：村上春樹 「沈黙」(初出：『村上春樹全作品 1979 - 1989』第5巻 1991)
- ②後期：朝井リョウ 「何者」(新潮社より書下ろし 2012)

今期初めて受け持つクラスであり、諸々の事情でレベルチェック前に作品を選定せざるをえなかったため困難を感じたが、前期は、村上春樹『レキシントンの幽霊』（文春文庫）を購入してもらい、まず「沈黙」を扱うこととした。

この作品は、筑摩書房の高校国語の教科書「現代文B」などにも採用されており、語り手の〈僕〉に対し〈大沢さん〉という人物が自身の癒えることのない中高生時代のトラウマを打ち明けるといふ非常に重みのある内容である。こちらも、テキストの大部分が話し言葉であるが、スラング的な語彙や文法の崩れはなく、日本語学習者には取り組み易いのではないかと考えた。また、日本の学歴社会の歪みや、偏見や差別、そして「いじめ」がいかに残酷なものであるか、という問題に触れさせるという目的はもちろんのこと、留学生たちが日本の生活のなかで「いじめ」などの不当な扱いを受ける可能性もなきにしもあらずなので、そのような状況に陥った時はどのような解決策があるかを彼ら自身に考えてほしいという思いもあった。「沈黙」の後は、他の短編も取り扱うことを予定していたが、結果として「沈黙」だけでタイムアウト

となった。

後期は、朝井リョウ「何者」(新潮文庫)を選定した。この作品は、就職活動やSNS上のコミュニケーションの功罪をモチーフとしたものであり、進路決定の岐路に立つBクラスの学習者たちは、この作品から何かしらのヒントを探り当ててくれるのではないかと考えた。また、現代の若年層特有の口語表現や、コノテーション的な表現がちりばめられており、一般的な日本語教育教材では学ぶことのできないリアルな若者言葉や、SNSを通じたコミュニケーションの危うさを体感できるメリットもあると思われた。なお、映画化もされているため、アダプテーションの側面からのアプローチも想定していた。

3. 授業の進め方

両クラス共に、オンラインツール“Zoom”と“WebClass”を併用して授業をおこなった。

②授業の進行方法

【事前学習の指示】

授業当日の一週間前に、WebClass「授業資料」欄に筆者(以下、この節では、“授業者”とする)が朗読した音声アップし、次回の範囲を指示。語彙等を調べながら読んでくるように予習を促す。授業当日使用のPowerPointスライドは、48時間前にアップする。

【授業当日】

- i. PowerPointスライドやインターネット公開の画面や動画を共有しながら、語彙・文法及び、文化・歴史・地理的背景を解説する。
- ii. テキストを内容で区切りながら授業者がゆっくりと朗読し、学習者には集中して音声を聴いてもらう。また、比較的平明な文章の部分は、学習者を指名して音読させる。語彙の意味、読み、文法もその都度再確認していく。
- iii. 朗読後は、学習者にいくつかの質問を行い、語彙・文法の理解度確認後は、時間を適宜与え、スライドの内容確認クイズに取り組みさせる。
- iv. 内容確認クイズを回答させ、内容の理解度確かめる。不正解であった場合は、解釈の相違も想定し、ディスカッションに持ち込む。単純な誤読だと判断できる場合は、テキストの根拠を示し、解説をする。
- v. 当日取り扱った範囲での作品についての感想、もしくは授業についての感想を一人ずつ述べさせる。ディスカッションに発展しうる可能性のある意見が出た

場合は、授業者がファシリテーターとしてディスカッションへと導く。

- vi. 課題の提示（漢字・語彙・文法事項の確認／作文）、次回の範囲を予告し、授業終了。課題の解説は基本的にWebClassに記載し、作文課題については次の授業の導入時にフィードバックする。

4. 学習者の反応

文学作品は当然好悪がわかるものであるが、強い関心を示した学習者たちと、「興味がない」と一蹴する学習者の理解度に甚だしい落差がみられた。

例えばAクラスでは、太宰治「葉桜と魔笛」について、語り手の妹の恋人〈M・T〉の存在をめぐる読みの解釈の幅を広げる感想や、江戸川乱歩「人間椅子」における、椅子職人の手紙が、職人とは思えない書きぶりであることや、椅子職人を騙る別人の存在の可能性を読み取ってみせるなど、読解力の深さを感じさせる学習者の発言が次々と上がり、議論が盛り上がった。このような学習者は終始カメラをオンにしており、興味深げな反応も見られて大変有難かった。

一方、当初は文学作品を取り扱うことに賛同しながらも、結局は「興味がない」として積極的に参加することのなかった学習者は、カメラオフ・ミュートを貫いており、指名しても反応しない、もしくは内容確認クイズも不正解が多かった。課題の提出もないため、モチベーションが上がらなかったものと思われる。このような学習者の一人に、どのようなものに「興味」があるかを聞き出すことに成功したが、「アニメ」「お化け」などといった答えが返ってきたため、インターバルとして怪談の回を入れてみたが、当人に授業を欠席されてしまったことは至極残念であった。一週間に一度の半期の授業で、すべての学習者のニーズに応えること、レベル差を埋めることは実際的に困難であることから、まず、意欲のある学習者が満足できる授業を心掛けることに専念することとした。

一方、Bクラスは、通信量の関係もあるということで全員がカメラオフ参加であり、授業内でのコミュニケーションは簡単ではなかったが、課題には積極的に取り組む学習者が多かった。

前期の村上春樹「沈黙」については、作文を多く課したが、学習者が卒業した高校の紹介や、いじめに遭った〈大沢さん〉の立場であればどのような解決方法を編み出すかなどの作文は興味深く、なかでも印象的であったのは、成人後もいじめの精神的外傷に悩まされている〈大沢さん〉が精神的に脆弱であると指摘し、理解不能であるとする意見がいくつかあったことである。これは、以前、筆者が都内男子校の高校二年生を対象に「沈黙」の授業をおこなったときにはみられなかった類のものであり、文化的背景の差異と割り切れるのかは不明であるが、非常に興味深く思われた。

また、後期の「何者」に関しては、授業開始後、映画「何者」を鑑賞した学習者が数名いたことがわかったため、映画の宣伝も兼ねた「何者」の作中人物を演じた6人の有名俳優の写真入りの文庫本カバーをスライドにアップし、映画のイメージを借りながら原作を読み込むというスタンスに切り替えた。インターネット配信の映画やドラマが簡単に視聴できる現在、日本語教育もメディアミックスを効果的に取り入れていくべきではないかと感じさせられた次第である。

5. 評価方法

授業への積極的な参加度30%、提出課題の内容30%、ミニレポート40%を統合した形成的評価とした。なお、コピー&ペーストなどの剽窃がみられたレポートも生じてしまい、即座に本人に連絡を取り再提出を促すこととなった。インターネット検索に浮上してくるような課題は避けるべきであることを痛感させられた。

6. 今後の課題

2020年11月、筆者は、朝日新聞EduA主催の教育セミナー「池上彰と考えるコロナ禍、その先の教育」(2020.11.22 於：ヒカリエホール)へのオンライン参加の機会を得たが、そこでも「翻弄される教育」と題して、池上氏の大学でのオンライン授業実践の報告がなされていた。池上氏もZoomを使用しているということであったが、得てしてツールとしてのZoomの優秀さについての言及が大部分であったように記憶している。

氏は、オンライン授業の方が、Active Learningや反転学習を取り込みやすく、チャット機能を用いると沢山の質問も受け付けられ、毎回の授業で教員が質問に対して丁寧に答えるようにすることで双方向の親身な指導が可能となったと述べていた。また、オンライン授業は、不登校の学生や体調を崩した学生も受け易いため、通常化した後も有効性を保ち続けるのではないかということ、さらに、Zoomなどのオンライン授業では、教え方の優劣がはっきりし、保護者が学生と共に授業を見ている場合があること、授業があまりに酷いと告発されるケースもあるということにも触れていた。

これらの氏の発言を俯瞰するだけでも、今後、授業者は、オンラインツールを駆使するスキルを身に着け、日々自らの授業方法を見直しアップデートを怠らず、コミュニケーション能力もさらに磨いていかなければならないことは必至であり、オンライン授業を取り込むことで、今後、授業の質は否が応でも向上せざるをえないのではないかといった希望的観測も生まれてくる。

確かに、池上氏の指摘の通り、オンライン授業は利点も多い。ちなみに、筆者が感

じたオンライン授業の長所は下記の通りである。

【Zoom, WebClass使用の利点】

- ・自宅から授業の配信ができ、節約した時間をスライド準備に充てることができる。
- ・私語などのノイズに悩まされることがない。
- ・出席状況が自動的に記録される。
- ・楽曲などを、CDやインターネットで即座に視聴させることができる。
- ・WebClassでは課題の採点が自動的におこなわれる。

一方、問題点は下記の通りである。

【Zoom, WebClass使用の欠点】

- ・携帯電話でZoomに参加し、屋外や電車の中で授業を受けている学習者がいる。指名すると、「外にいるので、教科書もなく答えられない」というチャットが来る。
- ・カメラオフ・ミュートを外さず、まったく反応しない学習者がいる。
- ・WebClassでの提出の方法がわからない、自分の書き込みだけが消えた、などの問い合わせへの対応に追われる。
- ・本名を表示しないでミーティングルームに入ってくる学習者がいる。

ただし、このような問題点が浮上した主な理由は、最初にこちらが明確なルールを明示するという肝心な基本を怠ったことにあると自省している。今年度の経験を活かし、まず、来年度は下記をルールとして示すことから始めたいと思う。

- ・アカウントには学籍番号と本名を表示すること。
- ・最初と最後だけでもカメラをオンにし、挨拶はきちんとすること。
- ・授業は屋内で、落ち着いた環境で受けること。
- ・指名されたら、必ず応答すること。
- ・やむを得ず離席する時、席に戻った後は、必ずチャットで知らせること。

また、今年度は、ブレイクアウトセッションなどの機能は、あまり使用する機会がなかったので、来年度はぜひ積極的に取り入れていきたい。

7. おわりに —— 日本語教育と文学“教材” ——

今回、文学作品を扱ったクラスを取り上げた理由の一つは、従来の日本語教育の方向性として、実用的な日本語運用能力の修得への偏重があり、文学作品鑑賞を日本語

教育に取り入れる試みが長らく躊躇されてきたという事態を遺憾に思ったということにある。

現在から遡ること6年となる調査結果ではあるが、Richings (2016)によると、日本国内の日本語教科書のうち、「文学的テキスト」を扱っているものはわずか4%にすぎず、また、酒井 (2015)によると、日本語学習者の「歴史や文学への関心」は実利的な目的を上回っており、日本の文学作品に接したいという学習者の要望が高いにもかかわらず、「教材」不足のため日本語教育界はその要望に応えられないでいるという。この背景には、文学のクリティカル・リーディングは「日本語学習のいわばアガリ的存在で、学部留学生対象の読解指導には望むべくもない。」(梅村 2003)といった見解などの根強さもあったのだろうと筆者は推測している。

確かに、文学作品を日本語教育の授業で取り扱うには、学習者側のレディネスの問題はむろんのこと、授業者側の負担も小さくはない。どの作品を扱うかという選定も簡単ではなく、さらに選定後は、入念な作品分析をし、自らの〈読み〉を立ち上げ、先行研究を洗い出す作業のほか、日本語教育の観点から、テキストに顕れている漢字・語彙・文法について整理をし、授業資料を作成しなければならない。そして、時間をかけたとしても、学習者の反応が悪く、不発に終わるケースももちろんある。

また、板書やジェスチャーが可能であった対面授業においても伝えることの難しさを感じていたが、オンライン授業ではさらに学習者の反応が測りかね、戸惑うこともあった。どうしても伝わらない場合は、用意していた小さなホワイトボードに絵を描いたり、学習者の母語を使って説明したものを書き、それをビデオにかざすなど、アナログな方法も取り入れたこともある。

コロナ禍にある現在、文学を教材として扱うことはますます困難になることも想定されるが、日本文学は日本文化を担う重要な要素の一つであり、学習者の要望もある以上、日本語教育に携わる授業者は、文学作品に触れる時間を少しでも増やし、授業の創意工夫を凝らすべきであることには変わりはない。

ところで、前掲の酒井 (2015) は、文学作品教材の不足を問題としたうえで、「文学教材選定」の「指針」として、「①口語文②現代仮名遣い③適度の抽象性④適度な作品構造の複雑性⑤時間的空間的設定が想起しやすい⑥適度な分量」を挙げ、詩作品の文学教材としての可能性を論じているが、筆者は、上記の指針に、授業者の経験値から、自信を持って授業ができると確信できる作品や、この時期の学習者にこそ読んでほしいと授業者が心から感じる作品を加えてもよいのではないかと考えている。一方で、文学作品を平易な表現にリライトした日本語学習“教材”や、原作の一部だけが抜粋された内容的に可もなく不可もない“教材”としての文学的文章などを見ると、学習者の意欲を刺激するもののようにには到底思われず、まず、こちらの食指が動かない。おそらく、言語能力向上のために編み直されたテキストは、文学作品として

の生命を失ってしまっているからであろう。

そもそも、文学テキストの読解には、言葉だけではなく行間を読むスキルも必要とされ、それは、その言語を母語とする者にとっても容易ではなく、もちろん誤読も生じうる。だが、何のノイズも生じない完璧な言語コミュニケーションの方が、現実的にはありえないのである。(殊に、「オンライン授業」を余儀なくされた今年度は、“言葉”のみで意思を伝えることの難しさをひしひしと感じさせられた。オンライン上のコミュニケーションが当たり前となってくるであろう今後は、“言葉”がこれまでよりも重要なものとなってくる可能性は十分に考えられよう。)

文学作品を取って“日本語教育教材”化せず、強いていうならば、むしろ“日本語教育教材”と捉えず、授業者と学習者、学習者同士の対話、もしくは学習者の内省のためのコミュニケーションツールと割り切って教室に持ち込むことは無謀であるかもしれない。しかし、“教材”としてデフォルメされていない生の原書を手に取り、どのような形であれストーリーや作品の世界観に触れ、自身の感得したところをアウトプットする経験を持つことは、逆説的ではあるが、学習者に次なるステップへの大きな自信をもたらすということもありうるのではないだろうか。

文学作品を日本語教育に取り込むことのメリットは、“言葉”を通して他者や異文化社会への想像力を働かせ、授業者と学習者、学習者同士が対話、あるいは内省し、互いを理解しようとする営為を通し、“言葉”によるコミュニケーションの現実的な壁を感じながらもそれを乗り越えていくスキルを修得することにある、ともいえる。さらに、文学作品や文学者の生涯などを素材としたメディアミックス作品が巷に溢れたインターネット社会である現代では、学びの場は教室だけに限らず、一つの作品、一人の作家との出会いが学習者の次なる興味関心の生成へと繋がりうることも考えられる。ハイカルチャーであると同時に、近年サブカルチャー的な受容もなされている日本の文学作品が、単なる“教材”としての枠を超え、日本語学習者にとって、多様性を有した日本文化へのさらなる関心への扉を開く存在となる可能性もなきにしもあらずであろう。

日本文学を取り入れた日本語教育を今後も試みる者として、来年からはさらに「オンライン授業」「対面授業」両者のメリットを揚棄した、学習者がより満足できる質の高い授業を提供できるよう、日々アンテナを張り、文学研究、日本語教育研究に邁進していきたいと考えている。

《参考文献》

- ・梅村 修「日本語教育における読解指導——extensive readingの試み」、『留学生教育』第8号、2003年。
- ・酒井隆之「留学生の日本語科目における文学教材の導入について——展望と課題——」、『国際研究論叢』28 (2)、2015年。
- ・Richings Vicky Ann「日本語教育・日本語学習における文学教材：現状と展望」関西学院大学リポジトリ kwansei.repo.nii.ac.jp, 2016年。